【投 稿】

サルモネラの迷い道(3)

中 野 良 宣
(空知支部)

3. 馬パラチフス

昨年12月から今年の春にかけ帯広市と豊頃町で馬のサルモネラ症である馬パラチフスが発生したといえます。2014年から姿を消していたこの病気が突然発生したのです。全容は判りませんが2戸で十数頭にも及ぶ発生があり小流行ともいふべき状況になったようです。

この情報に接した時、大学の教養課程で学んだ英語のテキストを思い出しました。それは、「トリアンプ・オブ・エッグ」という小説で、養鶏で一旗揚げようとした一家が鶏病の発生で行き詰り、それを背景に物語が進む小説でした。ニワトリと病原体の関係に、人の企てがもろくも崩れ去るのを「トリアンプ・オブ・エッグ＝タマゴの勝利」と表現し、「人の敗北」という意味を後ろに潜めているというのです。絶えたと思われた病が忽然と姿を現した時、この小説がうかび、感染症の強さ、「人の敗北」という言葉が連想されたのです。

止められない流産という本病の特徴は、生産者や診療所、家畜保健衛生所の先生方、関係者の皆様に多大な心労や苦労もたらします。まさに獣医技術の限界を目の当たりにすることになるのです。一方、長い潜在期間を経て発生した今回の馬パラチフスについて、次の発生を防ぐための知恵につながることを願うところでもあります。

この病気は昭和の中頃まで、軍事や産業を脅かす病気として法律上の「家畜伝染病」に指定されるほど重要な病気でした。道内各地で発生していましたが、ひとつの地域に限ると数年おきに流行が繰り返されるというのが特徴であり、発生農場では様々な対策を尻目に妊娠馬が次々流産し、まさに「流産の嵐」となります。

また、馬パラチフスは、典型的なチフス型の病型を示すサルモネラ症で、判らないことの多い、「迷い道」の中にある感染症でもあります。私は、釧路勤務時代、血清疫学や記述疫学の結果をもとに、子馬の時代に感染し、長期保菌の後、妊娠とともに再燃し流産に至るといふ発生メカニズムを提唱しました。後年、石井三都夫先生(当時釧路地区NOSAI)がこの仮説に沿った発生を北獣会誌(vol. 36、356-358、1992年)に報告し、この仮説は

本病の実態に迫ったものと考えています。それを基に石井先生も私も、発生時同居していた子馬は危険性の高い馬であるという考えを発言し、その認識は広く共有されたと思っていました。今はどうなのでしょう・・・。

当時、馬パラチフスは、大部分が根釧地方の発生で、口の悪い人は「風土病」とまで言いました。霧の湿原に放し飼いされ、野生馬のように群れる馬たちの少し暗いイメージが風土病という言葉を導いたのかもしれませんが。本病の発生が長年根釧地区に限られていたことも事実でありそうした呼び名にも一理がありました。

それが今は2014年の発生に引き続き十勝での発生となりました。明るい十勝に風土病などと言う言葉はそぐいませんが、昔は十勝も多発地として記録される地域でした。「昭和35年馬パラチフス検定状況」というガリ版刷りの全道集計では菌症411中268、流産119中65が十勝での陽性数とされています。全道の約半数が十勝ということであり「十勝の病気」でもあったのです。

ところで、この「菌症」という区分を不審に思われる向きもあろうかと思われます。この区分は馬パラチフス特有のもので、菌検索や抗体検査で「陽性」の場合を「菌症」と表現し、「発生」としたものです。抗体陽性については、共通抗原の問題もあり、検討の余地を残しますが、しばしば発生があった当時としては実態を反映した実際的な判断であったものと思われます。

このような場合も含め、抗体検査は馬パラチフスの動態を知る上での重要な手段として、しばしば行われていました。様々な検査の余剰血清を用いた抗体サーベイランスが、潜在する本病の実態を明らかにするため大きな役割を果たしていたのです。馬の血清を収集しづらくなった現在では、残念ながらこの手段に頼っての疫学的解析には期待が持てません。

また、ポニーなど小格馬の愛玩動物に感染が広がった場合も心配の種です。産業動物の馬に比べ獣医療との関係が薄く、産業動物においては一大事の流産が、愛玩用の馬であれば病気と見なされず、獣医療から落ちこぼれ潜在してしまう恐れもあるのです。

私の時代に比べ困難な条件の中、清浄化に取り組む関係の皆さんを陰から見守るばかりですが、2007～09年に実施された清浄化事業のような試みが再度行われることを期待するところです。

参考：馬パラチフスについては馬の文化誌「ヒポファイル」(No. 70、11-27、2018年)に一文を掲載していただき防疫を巡るエピソードをつづっています。

リサーチタッコブ(栗山町字中里51-125)

E-mail: inuwanwa@sea.plala.or.jp